附属学校部長就任のごあいさつ

附属学校部長　大　谷　光　長

このたび，思いがけなく附属学校部長に選ばれ，4月1日から就任することになりました。附属学校部発足以来10年が経過し，歴代の各部長は附属学校部の発展に大きな功績を残されている。私も附属学校部のより一層の発展に努力したいと考えております。

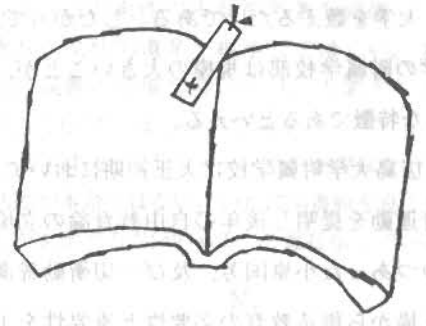
附属学校部長の職務は，学長の命を受け，附属学校部の部務を掌理することであると理解される。以下，部長としての基本的な心構えを明らかにし，また長年の未解決の問題を整理させていただいて，私のごあいさつとします。

昭和53年6月17日，教育学部の改組，学校教育学部の創設に伴って，附属学校部が広島大学に設置され，その結果以前の6教育学部附属学校園と5教育学部東雲分校附属学校園とが，附属学校部に所属することになった。計11の附属学校園（以下附属学校という）を擁する国立大学は，3大学を数えるだけである。したがって，広島大学の附属学校部は規模の大きいことが，その大きな特徴であるといえる。

また，広島大学附属学校は大正初期において，芸術教育運動を提唱し後年の自由教育論の立場を築きつつあった小原国芳，及び一切衝動皆満足論の立場から創造教育の必要性と重要性を主張し続けた千葉命吉など，その後の広島県及び日本全国の初等教育に多大の影響を与えた教育理論家・実践家の華やかで輝やかしい活躍の歴史をもっている。しかし，その反面きわめて少数の不心得の教官が，広島大学及び附属学校に一大不協和音を響かせた事実を忘れることはできない。輝やかしい光の面と汚濁の影の面とは，程度の差はあれ人間社会のどこにでもあることであって，それはわれわれが避けて通ることのできないものかもしれない。だからこそ，われわれは明るい明日の日の出を期待して，見直しあるいは改善に価値を見出すのです。11の附属学校のそれぞれに歴史があり，伝統がある。それはそれなりに尊重されるべきものである。しかしそれと同時に，附属学校部及び各附属学校は，新しい組織・機構においてそれぞれの存在を確認し，協力する運営のあり方を確立する努力を続ける必要がある。関係者は問題によって，そのつど改善の具体策を明らかにされてきた。そしてその改善策の精神は，すべての関係者に理解され納得されて，附属学校のあり方の基本理念として作動してきたと思われる。私はこれら改善策の精神に則って，附属学校部長としての職責を全うしたいと考えております。

ところで，広島大学は医学部と歯学部を除いて，その9学部がまもなく東広島市に集結する予定である。昨今，教員の質がこれまで以上に問題になっているが，教員養成の上で教育実習の果

たす役割はきわめて重い。教育実習のあり方については，各学部，附属学校とも新しいアイディア・構想を盛りこんだプログラムを作成して，効果的な教育実習を実施してきた。しかし，広島大学が東広島市へ移転する状況の中で，附属学校は教育実習の問題にどう対応するかについては，はっきりした線が出ていない。ただ附属幼稚園の移転だけが決まっているに過ぎない。移転するならどの時期にする，また移転しないならば教育実習はこのやり方でするなどについて，学部と附属学校との間でのこまかな詰の必要があると思う。

次に，附属学校が教育学部及び学校教育学部から独立して10年になるが，学部と附属学校との関係が次第に希薄化してきた，という問題がある。なるほど，附属学校は制度上は学長に直属している，が各学部と附属学校とは教育・研究面で緊密な関係を維持していてこそ，保育・教育の研究に協力可能であって，もしも両者間に疎遠の事実があるなら相互の関係回復を図る必要がある，と考えられる。

よろしくご指導ご協力のほどお願いいたします。